

教育講演 1

12月3日土 10:00～11:20

第2会場 市民会館大会議室

## ハンセン病の実態

原田 正孝

国立療養所菊池恵楓園

ハンセン病に関しては、世代でいろいろ印象や考え方も違っていると思われませんが、病気そのものの説明と恵楓園の沿革を中心に歴史的なことをお話ししたいと思います。

熊本県が発行している啓発のカタログに「ハンセン病とは？」としてハンセン病を以下のように説明しています。

「らい菌」による感染症です。皮膚や末梢神経がおかされる病気で、外見上に特徴的な変形が生じたり、知覚麻痺、視覚障害などが症状としてあげられます。遺伝する病気ではありません。

感染力はとても弱く、成人の場合、日常生活で感染することは殆どありません。これまで、ハンセン病療養所の職員でハンセン病になった人はいません。

感染は、免疫機能が未熟な乳幼児期がほとんどですが、発病には感染者の栄養状態や衛生環境が影響するため、これらの環境が向上している現在の日本では、発病の危険性はほとんどありません。もし、発病しても通院治療で治る病気です。

病気が治っても残っている身体上的変化は、後遺症にすぎません。治療法が確立されている現在では、早期に知慮すれば、身体に障害を残すことはありません。

以上がハンセン病に関する現在の認識と思いますが、病気の性質上治療薬が出来る前は差別や偏見の歴史であったことも事実で、さらにその偏見を助長したものが、厳格な隔離を規定したらい予防法との指摘もあり、今はその反省に立って世間一般に正しく伝えようとしています。また隔離した人達には今後の生活等に不安のないよう日常生活の援助や必要な医療等に充分なお世話をしようとしています。

熊本にはハンセン病に関連したことが幾つかあり、俗にハンセン病の神様と言われる加藤清正が本妙寺に祀られていますし、本妙寺の桜を見に行き参道で物乞いをしているハンセン病患者の集団をみて救済に立ち上がったイギリスのハンナ・リデル女史および姪のエダ・ライト女史のこと。今彼女達の住居は記念館として立田山の麓に残っています。同じころやはりハンセン病患者の救済を始めたカトリックのコール神父、それを引き継いで今もハンセン病患者のお世話を続けている民間の待労院が島崎にあります。菊池恵楓園は明治42年に全国に5カ所公立のハンセン病療養所が開設されたときのひとつで、当時九州療養所としてスタートしました。最大時は2200床まで増床されており、最高は約1,700有余名の入所者がいました。現在は510名の数で、平均年齢は76.4歳の状況です。

最近ではハンセン病の国賠訴訟の判決があったのも熊本ですし、ホテル宿泊拒否事件があったのも熊本です。ハンセン病に対する理解不足、差別意識がまだ解消していないのも事実だと思いますので、このあたりの事もお話ししたいと思います。

## 水俣病にまなぶ

原田 正純

熊本学園大学

発見から原因究明まで：1956年（昭和31）年5月1日に水俣病は熊本県水俣市の漁村地帯で発見された。最初は伝染病が疑われたが、すぐ、魚貝類が原因であることが分かった。しかも、その魚貝類を汚染しているものはチッソ水俣工場の廃水であることも分かった。水俣医師会を中心に患者の調査が行なわれた結果、1958年（昭和28）以来50人以上の患者が発生していたことが明らかになった。しかし、病因物質は不明であったためにチッソも行政も何の対策をとらず被害を拡大してしまった。原因と病因物質とを混同させて無策の口実にした。

1958年（昭和34）の11月になって、熊大研究班は「水俣病の原因はメチル水銀中毒で、チッソ水俣工場が汚染源である」と厚生省に報告した。発見からそれまで実に2年半もかかった。その間、人が死に病気で倒れてもチッソも行政も何の対策も立てませんでした。「工場廃水を止めよ」と押しかけてきた漁民を逮捕して裁判にかけたのです。経済成長のためには漁業被害どころか人の命や健康も軽視されたのでした。

公害被害は常に弱者の上に：水俣病発見のきっかけは幼児の患者の多発であった。このことは環境汚染によって人体に被害が及ぶ時、最初に被害を受けるのはその環境に住む幼児や老人、病人そして胎児など生理的弱者であることを物語っている。

最初、私が水俣病を訪れた時、最もショックを受けたのは、病気の悲惨さよりも貧困と差別に打ちひしがれた患者たちの姿だった。雨戸を閉めて隠れて、訪れた私たちに「帰ってくれ」と診察を拒否された。理由は「折角、世間が水俣病のことを忘れようとしている時に先生たちが来るとまたマスコミが騒ぐ、するとまた魚が売れなくなって皆に迷惑をかける」というのでした。もう1つは「何遍診てもらっても治らないから、もういい」というものでした。確かに医学は万能でなく、治せない病気は沢山あります。その時、医師はこのような場合に「何ができるか」、「何をすべきか」を患者たちから問われていたと思う。

何が公害の原点か：被害者たちのように自然に生き、自然と共に生きている人たちは一般的に言って経済力も権力にも無関係で、どちらかと言えば社会的に弱い立場の人たちが多い。水俣病が公害の原点と言われて世界的に有名になった重要なことは工場廃水に含まれた微量の毒物が自然の循環の中で濃縮され人に中毒を起したという特異な発生のメカニズムにあった。水俣病多発地帯に多数の脳性小児麻痺様の患者が多数みられていることは気付かれていた。しかし、当時の医学的常識では胎盤は毒物を通さないとされていた。1962年（昭和37）になって疫学的、臨床的、病理学的に世界ではじめての胎盤を通過して胎児におこったメチル水銀中毒であることが証明された。胎児性水俣病は人類の未来に対する重大な警告であったのです。

世界の各地でおこっている水銀汚染についても報告する。水銀問題に限ってみても、その教訓は活かされていない。

参考文献：原田正純：「水俣病」岩波新書。「水俣が映す世界」、「水俣学講義」日本評論社。